日本人への手紙

哲学者アランから戦後日本へ

新田昌英

遺された「手紙」

パリのフランス国立図書館には哲学者アランの草稿類が保存されている。その中に「日本人への手紙」（« Lettre à un japonais »）と題された文書がある[1]。1950 年 10 月 12 日の日付が入っており、アランは 1951 年 6 月 2 日に亡くなったので、この哲学者が最晩年に書いたものの一つということになる。学習用ノートへ 3 ページにわたって書かれた草稿は、「親愛なる友、偉大なる芸術家へ」という書き出しではじまっている。

この「手紙」は、アランが親交のあった彫刻家高田博厚（1900-1987）の求めに応じて、公開書簡の形で書いた原稿であると推定される。原稿は日本での出版を前提にして執筆されたが、何らかの事情で発表されないままに終わったものと思われる。

フランスで四半世紀以上を過ごし、当時のさまざまな知識人や芸術家と親交を持った高田は、1932 年頃にアランの肖像彫刻を作った（本稿末尾、図１，図２）。哲学者は若い芸術家の才能を認め、二人の交流はアランの晩年まで続いた。この関係は、結果的に見れば、日本人についてアランがまとまった考えを述べた希少な論考を引き出したことになるだろう。

本稿ではアランと高田博厚の交流の軌跡をたどりつつ「日本人への手紙」の由来を確認し、その全訳と読解の試みを掲載する。

高田博厚とアラン

1931 年に渡仏した高田は、当初アランのことを知らなかったようである。アランの胸像を制作する仕事は、友人の作家マルセル・マルティネのあっせ

[1] フランス国立図書館文書番号 NAF17762。

んによるもので、これは渡仏後の金策という意味合いがあったことを後に述懐している[2]。スポンサーはアランの友人ミシェル・アレクサンドルであった。

1932年2月、高田は彫刻制作の打ち合わせのため、ル・ヴェジネの自宅へアランを訪ね、胸像制作がはじまった。哲学者の第一印象と制作風景をそのまま引用しよう。

> 枝折戸を開けて玄関のある裏手へ廻ると、美丈夫が立っていて、微笑しながら手をさし出した。厳しい温顔というか、互いに名乗りもせずに握手した。通された客間はおそろしくせまい。その真ん中にピアノが据えてあり、左手に長椅子、右奥の窓際に秘書役ランブラン夫人の小さな仕事机がある。（･･･）「ここで大丈夫か？」とアランがきく。「結構です。それに、あなたはじっと動かないでいる必要はありません。勝手に動いてください。話もしてください」。こう答える私を彼は「わが意」を得たような好意ある目付で見た。「四、五回来てもかまいませんか？」「いいとも。君の好きなだけ･････」別れぎわに『美術二十講話』を取り出し、「彫刻家ヒロツ・タカタに。作品から観念に！　観念から作品ではない。アラン、一九三二年二月一四日」と書いてくれた。（･･･）私はアランに姿勢の注文はつけない。彼は二メートルほど離れた長椅子に掛けて、言葉を書き続け、窓際のランブラン夫人は原稿の清書をしている。彼は時々とろけるような目付で、もうお婆さんに近い彼女に微笑を送る。私と言葉を交わすことはほとんどない。筆を措いて、ピアノに坐り弾奏する。私はなんの考慮なしに手を動かしていった。顔の骨格や肉付の奥行が深いというより、内部から来るものの奥行を感じる。互いが話し合うのは茶を飲む時だけだが、べつにむずかしい話はしない。こうして四、五回ル・ヴェジネに通ったか。「自分の家で仕上げます」と粘土のままをアランが頼んでくれたタクシーでクラマールへ帰った。かなり遠かった。[3]

こうして作り上げた像の現物を高田はアランに見せなかった。「自分の作ったものに自信が持てなかったからである」という。しかし像の写真を見たアランは、「タカタは本物だ」と評価したとされる[4]。

---

[2] 「マルティネとアレキサンドルが私にアランの像を作らせると言った時、私はそれが私の窮状を和らげるためだということを充分承知していた。日本にいた時にはアランの名さえ知らず、フランスに来て思想家としての彼の大きさを聞いていたが、まだ彼の一冊の本をも読んではいなかった。写真で彼を見たが、いかにもノルマンディーの偉丈夫の顔立で、しかも優雅なものがある。風貌はともかく、フローベルに似たなにかを感じる。これが私に作れるか？」（高田博厚、『分水嶺』（1975）、『高田博厚著作集　I』、朝日新聞社、1985、p.231.）

[3] *Ibid.*, pp.234-235.

[4] *Cf. ibid.*, p.236.

高田はアランを読み始め、アランは新しい著作が出る度に高田へ送り、二人の交流は続いた。高田が一時期副業として行っていたポートワインの代理販売でアラン宅へ行くと、快く迎えてくれたこともあったという[5]。1937 年に高田はフランス文学者の桑原武夫を伴ってアランのもとを訪れている。アランの日記（1937 年 1 月 19 日付）によれば、アランは二人から日本語の本を受け取り、日本語のタイポグラフィーの美しさに感動している。高田については、「よく知っている人」といい、その表情にうかがわれる知性と快活さ、信頼感溢れる様子に感銘を受けている[6]。

二人が最後に会い、アランへ「手紙」の依頼がなされたのは、1950 年の秋であったことが「パリの憂愁」と題された高田のエッセイから推定される。高田は第二次世界大戦中のベルリンへの「流謫」、ソヴィエトの収容所暮らしを経て前年にフランスへ戻り、パリ近郊にアトリエを構えていた。「日本から依頼された用件で」ル・ヴェジネの自宅へアランを訪ねた高田は次のような依頼をし、アランはその場で承諾した。

> 「今の世界の状態の中で、人間は、少なくとも知性者は、つまりあなたはどうあるかを一寸書いてくれ。私から、日本に向かってあなたに特に書いてほしいと思うのは、思想を持つということが真の行為であること……それから拒絶することの力に就いて書いてほしい……」
>
> 私ひとりがしゃべっていて、彼は「うん……うん」とうなづきながら聴いていた。あんまり何も言わないので、気がついたら、彼は居眠りをしだした。私はそっと煙草をふかした。
>
> 十分もしたら目を覚まして、
>
> 「そうだ……君、思想は行動なのだよ……」と言った。やがて「否という力が一番強い……」と言った。私がひとりでしゃべっていたことは、私の考えでもあったし、アランの本を読んでいる私の彼への注文だったのである。

---

[5] 「ル・ヴェジネのアランのところへも〔販売する酒を〕三本ほど運んだ。「君といっしょに飲もう」と私のポルトーの杯を挙げたが、私のもうけ分を説明したら、「それじゃ、ここまで来る電車賃で失くなってしまうじゃないか」と彼は愉快そうに笑った。」（*Ibid.*, p.257.）

[6] 「高田博厚の持ち味も、〔もうひとりの日本人と同じく〕優雅なたぐいのものだが、おそらく日本的な様式にもとづくものである。しかし彼の顔のはっとするような特徴は、知性である。彼はもうひとりよりも小柄であり、顔がより近くに見える。動きのある額のしわ、心配事をほとんどうかがわせない眉、よく動き、生き生きとして精神的な口。ある快活さがその顔には表れている。それは消そうとするものを完全に消し去り、現れるすべてのものに対して熟考を巡らし、『彫刻家との対話』についても熟考したことのある顔である。一番驚いたのは、この人の近さである。ほとんど私の上に覆い被さるようにしており、信頼に満ちた様子であった。人種の違いは完全になくなっていた。」（Alain, *Journal*, inédit, daté du 19 janvier 1939.）

「よし、書こう。二週間ぐらいの中に書こう……」。そう言って、彼はどこかできいたことのあるという爆弾三勇士の自爆する勇気の話をしだした。[7]

アランの原稿が日本で出版された事実は現時点で確認されていない。高田は「日本から頼まれた同じ用件で、デュアメルに会った。パリにいないヴィルドラック、ジュール・ロマン、カミュには手紙を出した[8]」。この依頼を受けて書かれたと思われるジョルジュ・デュアメルの原稿は、「特別寄稿　日本の知識人に寄す」という題で『中央公論』の昭和26年10月号に、原稿の趣旨を説明した高田の後記付きで掲載されている。アランはこの年の6月に死去し、存命中のフランスの知識人ではなくなったこと、また以下に見るように、アランの「手紙」の内容が相当に難解なものであることなど、出版が実現しなかった様々な理由が考えられるが、いずれも想定の域を出ない。

「日本人への手紙」全文訳

親愛なる友、偉大なる芸術家へ

芸術家としてのあなたのことを私はいつも考えたいと思う。あなたの救済の基盤はそこにあるのだから。力は解決手段にならないことは人々の認めるところである。しかし再建の原理は個人の中に、個人の心の深奥に、世界の空しい大きさを高みから裁くところにある。日本精神は真のキリスト教精神であるということは、一度ならず言われてきたことである。神なき宗教は、物質の側でなければ、過去の中にしかないだろう。こうしてあなたのすべての徳は芸術家の徳なのだ。この点にこそまず注目して欲しいと私は思う。

私たちとあなたたちの間には模倣しかない。しかしその根底には同一性がある。この同一性が模倣を基礎づけているものであり、常に模倣を進展させていくものなのだ。そうしたことをあなたはやっている。

しかし究極のところは？　審判者を、すなわち個人を裁くことができるようになるべきだ。それによって、ある種の無限によって進歩は完遂する。判断の自由はそのあらゆる瞬間において無限なのだから。

そうしたことをよく感じつつも、あなたたちは、外部から内部を打ち負かされるままにするときには、死を求める習慣がある。純粋にして簡潔なる自

---

[7]高田博厚、「パリの憂鬱」（『群像』昭和25年7〜12月号初出）、『高田博厚著作集　I』所収、前掲書、p.460.

[8] *Ibid.*, p.463.

死を。このことについて、あなたたちは皆からそれほど遠いところにいるわけではない。皆があなた方を賞賛しているのだから。そして子細に見れば、ここからあなたたちの力もまた由来しているのだ。あなたたちの国にある、大勝利を収めた三人の男の像を私は見ていた。ただ爆弾だけを抱えて力の中心へ向かい、すべてが吹き飛ぶ。三人の英雄とともに。彼らは自分のことを考えはしなかった。勝つには一人の男さえいれば十分ということにもうじきなるのだろう。そしてそのような男はいくらでも見つかるわけだ！　あなたたちの力の中心がこうして明らかになったのであるから、あなたたちはそこへ避難して永遠になるべきだ。そうして力と行動のバランスを回復するのだ。今回はその目標が達成された。あらゆるものが永遠の過去に帰される。ある日本人が言った。元首に神を戴いている唯一の民族は我々の民族であると。

*

状況はその中心部において明らかになったので、あなたたちの破滅への道のりが何であるのか、またあなたたちの救済が何であるか述べたい。

あなたたちの破滅への歩みは、突然に力を得たこと、多くは知らず知らずのうちに力を得た民族を模倣して力を得たことである。

しかしあなたたちはすべてを望んだ。科学とすべてを。あなたたちを寛容へと導いた判断の自由さえも。こうした徳は力を失わせるものであるかもしれなかったが、逆に力を支えるものであった。もはや信じないということによってあなたたちは無敵である。物事を正面からとらえてみれば、負けることは精神的にどうでもよい。つまり、負けるということは不可能である。あなたたちは永遠なのだから。死を恐れないのだから。

こうして見てみると、農民の素朴さを、兵士の規律を、職工の諦観を持ち続けるためのものをあなたたちは持っている。それらは一民族が解体しないための徳である。だから模倣を警戒しなさい。それは偽りの徳しか作り上げない。富を警戒しなさい。それは見せかけでしかない。機械文明を備えた民族の外観に警戒しなさい。それはあなたたちの見本になろうとするが、なり得ない。

軍事独裁にも警戒しなさい。それは畢竟、あなたたちにとってはたいしたことのないものだ。あなたたちはみな、芸術と人間的な価値に再び息吹を与え、生命は内的な泉を備えた永遠の価値であることをみなに教えるためにこの世界にあることを確信しなさい。これは私が作品の中で常に主張してきた

ことなので、嘘を言っているのでないことはわかるはずです。むしろわたしはあなたたちのうちに我々人間の完成を見る。これは決して敗れることなく、あなたたちの有名なオプティミスム、その真の名は勇気であるものを何度でも証してくれるものです。

あなたたちに。卓越した人間性への確信とともに。そして個人的に、親愛なる芸術家よ、あなたたちは少なくともみな我々の芸術にとっては平等であり、進歩という言葉は、あなたたちにとってはすでになされた進化を意味しているに過ぎないのだという思想とともに。

あなたたちは永遠に入るために死ぬ必要のない地点に来ている。

あなたたちの気高い民族と首長へ、友情を込めて。

アラン

1950 年 10 月 12 日

「手紙」の内容について

「芸術家としてのあなたのことを私はいつも考えたいと思う」というひとりの相手への呼びかけからはじまる手紙は、「わたしたちとあなたたちの間には」（« Entre nous et vous »）という二つの集団間の比較をする一般的な論調へとすぐに変わる。二人称代名詞の« vous »でアランは相手を呼びながら手紙を続けるが、この« vous »は、「親愛なる友、偉大なる芸術家」である「ひとりの日本人」（« un japonais »）の「あなた」個人と、彼を含む日本人全体である「あなたたち」の間を揺れ動く。それに対する「わたしたち」（« nous »）は、フランス人、またはより一般的に西洋人だろう。この「手紙」が高田博厚の要請に応えて書かれた公開書簡の原稿であったとすると、「偉大な芸術家」個人に宛てて書かれていながらも、内容が私信というよりはむしろ日本人論であることに説明がつく。次に「手紙」中の話題の流れを大まかに把握しておこう。

「手紙」の著者は、「芸術家としてのあなた」という相手への個人的な思いを述べることから始めるが、話題はすぐに「日本精神」に移る。日本人の

「力の中心」すなわち強みは何であるかという考察の後に「破滅への道のり」について語る。後半部では、「警戒しなさい」（« défiez-vous »）という表現を繰り返し、「救済」への提言をしている。短い文章の中でアランは日本人の在り方を分析し、自らの思想に依拠して、これからの日本人の生き方について彼なりの指針を提示している。それがどのようなものであったかを理解するために、以下では個別の論点を敷衍してみよう。

芸術と救済

芸術家であるということが救済の基盤であるという冒頭の一文は、アランの芸術論を前提として理解すべきだろう。『諸芸術の体系』や『芸術に関する二十講』をはじめとする数々の芸術論でアランが繰り返し主張していることは、極端な単純化を恐れずに言えば、およそ次のようなことだ。諸芸術の形態は、各々が制作者あるいは鑑賞者に要求する身体運動と知覚によって、外部においては身体を、内部においては思考を規制することで情念（passion）を乗り越え、そのことによって、自由な精神（esprit）としての自己を認識するための道筋を示している。存在者を超えて存在を規定する不可分で無限な精神の認識にいたろうとする芸術は、宗教の表現形態である。芸術の実践は宗教的な救いに至る道である。

日本精神とキリスト教精神

アランがどのような文献資料によって日本の情報を得たのかは定かではない。したがって、「日本精神は真のキリスト教精神であるということは、一度ならず言われてきたことである」と何を根拠に言うのか確かめることはできない。しかしアランの宗教論におけるキリスト教の位置づけを確認することで、アランのいう「日本精神」に近づくための傍証を得ることはできる。

アランは諸宗教を 3 つの宗教へ分類し、各々の宗教を、人類の歴史的な発展段階（étapes）ではなく、あらゆる個人のうちに時代を超えて常に見いだされる階層（étages）の秩序を示すものと見る。ここで『神話学序説』（*Préliminaires à la mythologie*）や『神々』（*Les Dieux*）等の著作に表れる諸宗教の分類を確認しておこう。もっとも原初的な第 1 の「自然宗教」（les Religions de la Nature）は、自然現象に表れる絶対的な力を恐れ、従属することから生まれる思考である。第 2 の階層は「政治的宗教」（la religion politique）や「オリンピアの宗教」（la religion olympienne）あるいは「人間の宗教」（la religion de l'Homme）などと呼ばれ、人間自身のさまざまな美質が神格化された宗教である。伝説や神話に表れる神人は、人間が人間自身にとって最高の価値であることを示

している。第3の宗教は「精神の宗教」（la religion de l'esprit）と呼ばれ、これは実質的にはキリスト教のことである。人間にとってなにものにも犯されない最高の価値は、時空間そのものを規定する精神しかないことが認識される。精神は個人の内奥または主観性そのものでありながら、あらゆる個人に通底する普遍的かつ客観的なものである。これは情念を排した人間の理性的な思考である。つまりアランにとってのキリスト教とは、普遍的で自由な精神に対する理性的な崇敬に他ならない。アランの言う「日本精神」は、そのような宗教性を持つものとして理解されているということはできるだろう。

軍国主義と死生観

敗戦後の日本人に向けて書かれた「手紙」は、２回の大戦を生きたアランによる日本軍国主義とその死生観についての独特な理解を示している。高田博厚がアランとの会見記で書き留めた爆弾三勇士（肉弾三勇士）についての話は、「手紙」にも出てくる。爆弾を抱えて上海事変下の中国で敵陣に突入し、爆死したとされる三人の日本軍兵士の逸話は、戦時下の日本では自国民の勇敢さを示す美談として人口に膾炙し、東京では爆弾を抱えた三人の銅像が建立された。この「三人の男の記念碑」について知っていたアランは、戦場における自らの死生観に引き寄せながら三人の死について語る。熱い賞賛の口調で語られる日本人の「純粋にして単純なる自死」は、「あなたたち〔日本人〕の力の中心」に関わることである。

このようなアランの見方は、一見、戦時下の日本人の愛国心を手放しで賞賛するもののように見える。しかし「手紙」以前にアランが書いた他の文章では、戦場における兵士の死と愛国心との間にはむしろ何の関係もないことが示される。

> 〔突撃する歩兵や墜落する航空兵の〕深い幸福は、彼ら自身と同じくらいに彼ら自身の生命にしっかりと固定されているものだ。彼らは幸福をまるで武器のようにして戦ったのである。したがって、死にゆく兵士の中には幸福があるということができるのであった。しかしここでは元来スピノザに属する次のような形式を使って言うべきである。彼らは祖国のために死んだからこそ幸福なのではない。逆に、彼らは幸福だったからこそ死ぬ力があったのだ。[9]

[9] « Bonheur est vertu » (Propos du 6 novembre 1922), in *Propos sur le bonheur*, Paris, Gallimard, coll. Folio, 1985, p.204.

「死にゆく兵士の中には幸福がある」という表現は、行動と自由と幸福をめぐるアランの思想を端的に示すものとして読むことができる。アランによれば、幸福は能動的な行動の中にある。能動的な行動は、快さをもたらす[10]。自らの意志によって引き起こす身体や世界の変化を知覚することにより、私は自らが自由な力に満ちた精神であることを知る。そうした認識が幸福そのものである[11]。人が自らの中に幸福を持つということは、一回ごとの行動の中で、自らの自由を感得することによって、その都度新たに認識するしかないことである[12]。

上記のような思想から、危険で困難な状況での自発的な行動こそが幸福をもたらすという思想が帰結する。死と隣り合わせにある戦場の兵士は幸福な人間の一人だという思想まであと一歩である[13]。

戦場での死とは行動する人間が迎える一つの結末であって、進退窮まった人間が恐れと絶望の中に迎える悲劇ではない。戦う人の死は生命力の横溢そのものである[14]。

---

[10] 「被るのではなく成すこと。これが快さの根本である。」（« Aristote » (Propos du 15 septembre 1924), *ibid.*, p.113.）

[11] 能動的な幸福（bonheur）の認識は、受動的な心地よさ（plaisir）の認識とは似て非なるものである。前者には自由があり、後者にはない。「ランナーたちはみな自分に苦痛を与えている。サッカー選手たちも自分に苦痛を与えている。ボクサーたちも自分に苦痛を与えている。〔･･･〕上記のことについて、男たちは自ら求める苦痛の中に心地よさを見いだしていると言われるだろう。しかしそんなふうに言うのは言葉の遊びだ。それは心地よさではなく幸福と言うべきである。両者はたいへん異なるものだ。隷属と自由くらいに。」（« Agir » (Propos du 3 avril 1911), *ibid.*, p.102.）

[12] 「じっさい、幸福は小さな断片に分かれているのです。」（Dédicace à Mme Morre-Lambelin, *ibid.*, p.10.）

[13] 「〔･･･〕あらゆる幸福は本質的に詩であり、詩とは行動（能動）のことである〔･･･〕戦争で好ましいことは、それを人が〔自ら〕やるということだと私は思う。人は武器を持った瞬間から、各々が明らかに自由だ。男たちを強制的に戦わせようとする参謀本部などというものがあったとしたら笑ってしまうだろう。男たちは自らの自由を感じた瞬間から新しい生に入り、それを味わうのだ。死はつねに恐れなくてはならない。待たなくてはならない。そして被らねばならない。しかし死の先へ行き、決戦場で死を呼ぶようなことをする者は、自分が死より強いと感じる。兵士にとって死は待つよりも探しに行く方がたやすいことは皆知っている。人は時がもたらす運命よりも、自ら作り出す運命の方を好む。だから戦争の中には詩があり、それによって人はもはや敵を憎むことすらしなくなる。戦争やあらゆる情念を理解させてくれるのは、この自由についての酔いだ。」（*Ibid.*, p.103.）

[14] 「死への恐れは暇人の思想であり、非常に危険な差し迫った行動に出るやいなや直ちに消えてしまうようなものだ。戦闘とは、おそらく人が最も死について考えることの少ない状況である。したがって次のような逆説が成り立つ。人は自らの生命を満たせば満たすほどそれを失うことを恐れなくなる。」（« L'ennui » (Propos du 29 janvier 1909), *ibid.*, p.95.）

戦場での死生観についてこのように確認してみると、日本人の自死について述べた「手紙」でのアランの思考の運動が把握できるように思われる。「あなたたちは、外部から内部を打ち負かされるままにするときには、死を求める習慣がある。純粋にして簡潔なる自死を」と書き起こすときには、やむにやまれぬ状況に陥った日本人兵士が、潔く自決するときのある種の諦観について語っているように見える。こうした自死の習慣は、武士道の名の下に喧伝された日本人固有の文化であるように見える。しかしこのような習慣を持つ日本人は「皆からそれほど遠いところにいるわけではない」。自死の習慣は、異なる文化圏の人々にも理解され、賞賛されている。自ら「純粋にして簡潔なる自死」を求める習慣は、日本人の力の源である。このことを説明するためにアランは爆弾三勇士の逸話を参照する。そこで語られる兵士たちの「大勝利」は熱狂的な賞賛口調であり、三人を軍神として祀った日本人の愛国主義的な解釈を踏襲しているように見える。しかし戦場での死生観についてアランが書いてきたことを参照すると、三人の「大勝利」は大日本帝国の勝利である以前に、自ら死ぬ力を持ち得た彼らの個人的な勝利であって、さらには自由な精神そのものの勝利であることが理解されるだろう。そのように英雄的な行動を達成して死んでいくことのできる人間がいるということが日本人の「力の中心」である。

ノート 3 頁にわたって書かれた「手紙」では永遠（éternel）という形容詞が 4 回繰り返して使われている。日本人が永遠である、あるいは永遠の中に入るとアランが書くとき、永遠という語の指すところを説明はしない。それが何か高い価値を持つものであることは理解されるものの、結局のところ判然としない状態のまま満足するほかないが、少なくとも、アランがそれまでに綴った宗教論では、永遠という語は 2 つの仕方で理解することができる。爆弾三勇士のエピソードの後で唐突に言及される天皇制についても同様だろう。

1）人が死ぬと故人の属性のうちでよい部分だけが記憶され、つまり美化され、不死の存在として永続的な祖先崇拝の対象となる、ということのうちにアランはひとつの宗教的形態を見ていた。これはアランが挙げた 3 つの宗教のうちで「政治宗教」あるいは「人間の宗教」に特有の現象とされる[15]。3

[15] 「政治宗教」における祖先崇拝のなりたちをアランは次のように説明している。「政治宗教は完全に記念（commémoration）によって成り立っている。これは家庭と祖先の宗教である。〔･･･〕亡くなった親しい人の自然な思い出は、最初のうちは、その人が老いさらばえた衝撃的な姿のせいで、さらには我々をいきり立つ馬のようにのけぞらせる死そのもののせいで、恐ろしいものである。〔追憶における〕このよう

つの宗教が人類の歴史的な発展「段階」ではなく、「階層」であるとアランが言うとき、一個人のうちにはつねに3つの宗教形態が同居しているということを言おうとしている[16]。したがって3つの宗教は相互に排他的なものではなく、すべてが混交した形態で発現することは認められる[17]。英雄的な行動により自由な精神の価値を示した爆弾三勇士は、死んで「永遠の過去に還元」されることによって永遠になった。

2）アランのいう「精神の宗教」で最高の価値として崇敬の対象になる精神は、時間性から脱却している。すなわち、永遠である。

> 〔･･･〕最高の価値としての精神の概念は、時間的な力の概念をまったく含まない。むしろ排斥する。[18]

こうした言明の背後には、精神こそが時空間を規定するというアランの認識論がある。精神が最高の価値であることが認められるのは、精神が最終的な審級として人間を人間たらしめるものであり、また精神があらゆる経験の領域から独立していることが認められる限りにおいてである。福音書のイエスが「わたしの国はこの世のものではない」（ヨハネ 18:36）というとき、その国は精神の国であると理解するようにアランは促す。このように解釈するとき、「精神の宗教」としてのキリスト教が説く不死や永遠の生は、時間性を脱却した精神にのみ求められなくてはならない[19]。「精神の宗教」によれ

な〔思考の〕動きは思ったほど重要なものではない。ただここで特に注目すべきことは、このような動きは敬虔さというものにまったく相反しており、乗り越えるべきものだということである。死者のことを想って泣く時に死者を冒涜するようなやりかたがあるのだ。そういうわけで、これは〔亡くなった人への〕本当の愛情のなせるわざなのだが、人は死者を元気な姿で、さらには美しい姿で思い描くようになる。この自然な作業はかなり先の方まで進行する。死、病気、年齢、弱さといった徴を死者の顔に見たくはないので、人は死者をより強く、調和がとれていて、勇気があり、一貫性があるものとして、つまり死者が実際にはそうであった以上に彼ら自身に似ているものとして思い浮かべるということを、なすべくしてなすのである。これは死者を文字通り不死のものとして考えることである。」（*Préliminaire à la mythologie*, op. cit., pp.1145-1146. ）このようにして美化された死者が崇拝の対象となったとき、「我々の自然な神は、拡大されて純化されたわれわれの死者たちである。」（*ibid.*, pp.1146-1147.）

16 「3つの宗教は〔プラトンの学説に言う腹、胸、頭という〕人間のこれら3つの部分に関わるものであり、したがってあらゆる人間のうちに積み重なってあるものだということにのみ注意していただきたい。」（*ibid.*, p.1200.）

17 Cf., *ibid.*, p.1169.

18 *Ibid.*, p.1160.

19 「〔･･･〕「わたしの国はこの世のものではない」という言葉は直接的な意味があり大変含蓄に富む。これは、精神は精神以外のもので贖うことはできないとつねに言

ば、永遠であること、永遠の中に入ることは、みずからが自由な精神であると知ることである。

近代国家日本とその凋落

近代国家としての日本の急速な発展も、敗戦という破滅も、ひとつのことが原因だとアランは考える。それは、日本人が、「多くは知らず知らずのうちに力を得た民族を模倣して力を得たこと」であった。西洋の模倣に終始する民族という日本人観は、洋装して鏡を見る日本人を猿真似として描いたビゴーの見方からそう遠くはない、19 世紀以来のステレオタイプである。しかし日本人は「すべてを望んだ」ともアランは言う。科学技術だけではなく、判断の自由や批判精神も日本人は西洋から取り入れた。「こうした徳は力を失わせるものであるかもしれなかったが、逆に力を支えるものであった」。「精神の宗教」が体現する自由な精神は、地上の権力や暴力に犯されることのない最高の価値であることを日本人は知った。

ある民族が他の民族を模倣しうるということは、両者の間に何らかの共通な基盤が存在しなければ起こりえないことである。つまり模倣を基礎づけているものは精神の普遍性であることにアランは注目していた。自由で普遍的な精神を信じなければならないこと、信じることによってのみそれはありうるものだということは、アランがその全著作を通して繰り返し説いたことであった。

アランの提言

「警戒しなさい」という表現の繰り返しで語られる日本人の「救済」は、各人が自らに問いかけて判断の自由を行使するところにのみ成立しうる個人的な救いである。20 世紀に入って間もない頃、リセの学生たちに向けてアランは『眠りの商人たち』[20]という演説をした。若者たちの前途にはこれから「眠りの商人たち」が現れ、思考を停止するよう促すことだろう。しかし彼らに抗って状況を検分する懐疑の精神を保ち、判断の自由を行使しなければ

うことなのだ。この思想に従えば、天国と不死の観念はただちに純化されることとなる。〔この思想に従うと、〕金持ちになったり、権力を得たり、時間の余裕を得たり、食いしん坊になったり、人を軽蔑したり、勝ち誇った人間になったり、その他もろもろの状態になったりしようと考えてはならないので、永遠の生は時間の中にはないことになろう。つまり、永遠の生は、何かを企んだり、計画を立てたり、成功したりして得られるものではないのだ。永遠の生は永遠である、つまり時間とは関わりがないとも言われる。」（*ibid.*, p.1183.）

[20] *Les Marchands de sommeil*, Discours de distribution des prix du lycée Condorcet en 1904.

ならない。それが目覚めるということだ。このような趣旨の演説をしてからおよそ半世紀後、日本人に向かって個人の判断の自由が重要であると説く姿勢は変わらなかった。

反省を伴わない模倣は「偽りの徳」であり、富は見せかけにすぎない。本当に大事なことは、人は「みな、芸術と人間的な価値に再び息吹を与え、生命は内的な泉を備えた永遠の価値であることをみなに教えるためにこの世界にあると確信」することなのだ。しかし「機械的民族のあらゆる外観」とは何だろうか。近代の機械化された文明によって国力を蓄積する西洋の諸民族のことであろうか。『眠りの商人たち』でこの哲学者が批判したような、体系的思考に安住して批判的思考を忘れた人々というほどの意味であろうか。判然としない。いずれにせよ、それらは日本人を教導しようとする外部の勢力であるのだが、日本人にとっては規範になり得ないものなのだとアランはいう。

軍事独裁は警戒すべきものであるが、日本人にとってそれはたいしたことのないものだとアランは言い切る。「力は解決手段にならない」。暴力によって判断の自由を奪い、人を打ち負かすことはできないからだ。芸術と人間的価値を再活性化し、生命が内的な泉をたたえた永遠の価値であると知ることが「人間の完成」であり、「あなたたち〔日本人の〕有名なオプティミスムを何度でも証してくれるもの」だと述べるとき、アランは自身の思想と日本精神を完全に同一化している。

図１
アラン胸像
高田博厚作（1932 年）
所蔵・写真提供：鎌倉市

図２
アラン頭部像
高田博厚作（1932 年）
所蔵・写真提供：鎌倉市

付記

筆者の拙い翻刻を見て「日本人への手紙」の正確な全文翻刻をお送りくださり、日本人との会見を綴ったアランの日記を教えてくださった Emmanuel Blondel 氏、アラン像の写真をご提供いただいた鎌倉市、写真掲載をご快諾くださったのみならず、貴重な資料をお送りくださった大野惇氏にこの場を借りて心よりお礼申し上げます。